

文芸OGネットワーク通信

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1
 共立女子大学文学部劇芸術研究室内 文芸OGネットワーク
 URL www.kyoritsu-wu.ac.jp/bungei
 代表 多田 久恵 発行：2021.3.27

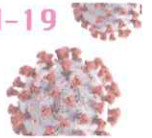
vol. 33



インフルエンザウイルスに見舞われた昔と今

1918 Spanish Flu

2019 Covid-19



1942年製作の米映画「心の旅路」は、第一次大戦終了（1919）直後のイギリスが舞台である。戦争で記憶を失った主人公に酒場のバーテンダーが「たちの悪い風邪が流行っているから気をつけな」と声をかける。訛りが強くてflu（風邪）という単語しか聞き取れないが、これが1918年から感染が始まったスペイン風邪のことである。当時の世界人口は約18億人、その半数から3分の1が感染し、3～5%が死亡したと推定されている。日本でも1918（大正7）年5月から1920年5月頃まで3回にわたって流行し、45万人が亡くなっている。

劇作家・演出家の島村抱月は松井須磨子から風邪をうつされ、元気になった須磨子が舞台稽古に出かけている間に危篤状態になり、あっけなく亡くなってしまった。磯田道史氏によれば「昭和天皇、秩父宮、原敬、山県有朋、志賀直哉、斎藤茂吉、永井荷風などが感染し、大正天皇も感染されたいらしい」（『感染症の日本史』2020）。11人の子供を抱えていた与謝野晶子は、「冬はインフルエンザとなり／喘息となり／気管支炎となり／肺炎となりて／親と子と八人を責め苛む。」と感染が一向に収まらないインフルエンザに対しての恐怖を詠んでいる（石弘之著『感染症の世界史』2018）。

スペイン風邪流行からほぼ100年たった2019年12月、中国武漢で発生した新型コロナウイルス Covid19は瞬間に全世界に広まっていき、いまだ終息の気配が見えない。全世界の累計感染者数は109,156,886人、死者2,407,873人、日本では累計感染者数419,053人、死者7,144人である（2021年2月15日現在、ジョンズ・ホプキンス大学による調査をもとにNHKが発表したもの）。大学はリモート授業にきりかわり、公的、私的にかかわらず、多数の人々が集まる催し物が中止に追い込まれた。音楽会、映画・演劇、スポーツ、食事会、飲み会、旅行などなど。OGネットワークも通常の活動を中止せざるをえなかったが、演劇資料整理メンバーの村上智子さんが、文学座アトリエと劇団民藝の公演ポスター写真集を作成してくださった。資料室には文学座、俳優座、その他大小様々な劇団のポスターが沢山保管されており、整理発表される機会を待っている。

与謝野晶子の時代より感染症対策は遙かに進んでいると思われるが、見えない敵への恐怖は同じである。弱者救済と医療支援がさらに充実されることを願ってやまない。

多田久恵（1970院卒）



劇団民藝公演ポスター集



文学座アトリエ公演ポスター集

新舞踊運動(下)

前号に引き続き百瀬好子さんに「新舞踊運動」について書いていただきました。

前号で述べましたように、坪内逍遙の唱えた舞踊改革を確かな流れにのせることが出来たのは女性の踊り手たちで、主に芸者という立場で芸を磨いてきた芸能者でした。当時は舞踊家という語も位置付けもなく、日本舞踊は「歌舞伎役者と踊りの師匠と芸者だけ」のものといわれ、歌舞伎の舞台とおさらい会しか発表の場はありませんでした。その新しい舞踊運動の先頭に立ったのが初代藤蔭静枝(当時藤間、のち藤蔭静樹)でした。

静枝は明治13年(1880)新潟市に生まれ、妓楼庄内家の養女となり、踊りを仕込まれました。志を抱いて上京した静枝は、20歳の時に憧れであった市川九女八の門下生となります。この間に、依田学海に漢学を学び、また、「竹柏会」^{ちくはくかい}に入門して、佐佐木信綱から歌を学んでいます。役者を目指しますが、九女八から、小柄で役者には不向きであるといわれ諦めます。

役者を諦めた静枝が次に選んだのは舞踊でした。九女八に二世藤間勘右衛門を紹介され、名取になったのは明治43年(1910)、31歳、藤間静枝が誕生します。今日では考えられない、価値のある、重みのある名取でした。そこで、舞踊を看板に新橋から「余興芸者」として自立します。その間、静枝は東京での「カフェ」第一号の「カフェ・プランタン」の会員になっています。当時の「カフェ・プランタン」は画家や役者、流行作家や文化人が

メンバーになっている文化的サロンで、後に夫となる永井荷風とも出会っています。やがて荷風との結婚によって芸者をやめますが、結婚半年で去り状を残し、荷風の家を出ました。芸者に戻った静枝は、この時、真剣に舞踊で身を立てることを決意したようです。

藤蔭静枝がその活動母体としたのは「藤蔭会」でした。創設は大正6年(1917)で創立時の同人は「藤蔭会」の命名者で、後に東京美術学校(現東京芸術大学)の校長となった和田英作、福地桜痴の息子である福地信世、和田の愛弟子である田中良の三人で、後に文芸、音楽担当の町田嘉章、照明の遠山静雄が参加しています。当時の先進的な専門家をブレーンとして研究会を創っていることが注目されます。「藤蔭会」は大正6年の第1回から昭和12年(1937)の第38回公演まで、活動をおこなっています。

大正10年(1921)、新舞踊運動は宝塚歌劇をはじめ、若手歌舞伎役者、日本舞踊の流派が加わり、活発になっていきました。昭和になると、多くの女性舞踊家がこの運動に参入しました。こうして、新舞踊運動は藤蔭静枝を先駆として、歌舞伎役者を引き入れ、舞踊流派を巻き込み、多くの女性舞踊家の進出をもたらし、舞踊史の一頁を飾ることになったのです。

百瀬好子(1960卒、2007院卒)

著書紹介 『秋元松代のフォークロア的世界 -「異界」との交流-』(岡本利佳著)



「増補版」

2018年英宝社刊

著者は本学大学院文芸学研究科修士課程を2009年に修了。2011年『秋元松代のフォークロア的世界』の初版を出版。今回は増補版で、三つの補論と新しい写真が加えられた。

秋元松代(1911-2001)は戦後日本の演劇に革命的な変化をもたらした現代日本演劇史上最高の劇作家とされている人である。蜷川幸雄演出の「近松心中物語-それは恋-」などの舞台でご存じの方が多いかも知れない。

著者は秋元のフォークロア(民俗)的作品には二つの特性があると言う。一つは社会的弱者、秋元の言う「疎外され、弾き出された人々」に対する執拗な眼差し。もう一つは「異界」との交流である。この二つの特性に視点を当てるのに最も適している以下の五つの作品だけを取り上げて論述していく。()内は異界を示す。「常陸坊海尊」^{ひたちぼうかいそん}(東北/海尊伝説・巫女伝説)、「かさぶた式部考」(熊本/和泉式部伝説)、「きぬという道連れ」(丹後/羽衣伝説他)、「七人みさき」(四国/平家落人伝説・源氏物語)、「アディオス号の歌」(熊本/天草四郎伝説)。「常陸坊海尊」では「疎外され、弾き出された人々」が「異界」との交流の中で救われていく。これが基本パターンだと著者は言う。しかし「異界」は必ずしも救いの手を差し出す場とは限らない。「七人みさき」のように魔界、魔性、獣性、死霊、怨霊などによって破滅へと追いやられる世界もある。

「疎外され、弾き出された人々」として「異界」との交流とは何なのか。多くの「疎外され、弾き出された人々」を生み出している今こそ、秋元松代のフォークロア的世界に導かれる意味は大きい。本書は我々を「異界」を覗き見る鏡の前に立たせてくれる。

佐藤和代(1966卒)



女性の自立と社会的地位向上をめざす建学精神のもと、創立134周年を迎えた共立女子学園。学び舎を築いたあと、仕事や家庭、地域など社会の様々なシーンで共立spiritを放っているOGを紹介していきます。

file 9 小山ひとみ

Hitomi Oyama

中国のミレニアル世代やカルチャーを得意とするライターとして、またコーディネーターとして活躍中の小山ひとみさん(1996年劇芸術コース卒)。

大学時代の恩師との出会いや北京留学での思い出、仕事のやりがいなどを聞かせていただきました。

—まずは、大学生活で印象に残っている思い出、出会いについて聞かせてください。

非常勤講師だった映画評論家、故和久本みさ子先生との出会いは、私のその後の進路に大きな影響を与えてくれました。大学3年の時、映画にはまっていた私は、見た映画の感想と映画の半券をノートに記録していました。そのノートを先生に見せたところ、「『キネマ旬報』の編集長を紹介するわ」と言ってくださり、編集長に会ったその日に『キネマ旬報』の編集部でのアルバイトが決まりました。一人の映画好きの大学生が、歴史ある映画雑誌の編集部でアルバイトができるとは思ってもいなかったのですが、ただただ嬉しかったのを覚えています。アルバイトを通して、好きなことを仕事にすることの楽しさと苦しみを知ったように思います。

—それは貴重な経験でしたね。その後、映画への情熱はますます高まって？

そうですね、映画熱はずっと続き、大学卒業後の進路を考えた時、特に好きだった中国映画を字幕なしで見られたらいいな、という単純な考えから、1996年から1年間、北京への語学留学を決めました。

—北京での生活はいかがでしたか？

初めての一人暮らしが海外で、しかも、言葉が通じない状態で北京に行ったので、戸惑うことばかりでした。授業が終わった後はできるだけ外に出て、現地の人と話すようにしていました。また、世界各国からの留学生との交流は、日本ではなかなか経験できないことなので、とても貴重でした。映画好きの留学生に出された課題で、初めて映画出演にチャレンジしたり、語学を学ぶ以外でもたくさんの「初めて」の経験がありました。

—その後、帰国されて就職はどの道に？

帰国後は、共立女子短期大学英語・英米文学学科で満期まで助手を務めました。休みになると中国旅行に行き、中国語を忘れないよう心がけていました。ただ、また北京で暮らしたいという思いはずっとあり、チャンスを探していました。そんななか、2003年、北京のラジオ局日本語部勤務の話をいただき、「待っていました！」と再び北京へ行くことを決めました。

—再び北京へ！中国のラジオ局に勤務されたのですね！

はい、中国のカルチャーを紹介する番組を担当し、連日、アーティストやミュージシャン、デザイナーなどを取材していました。ちょうど北京オリンピックへ向かう時で、エネルギッシュな北京での5年間を満喫しました。

—濃密な時間を過ごされたのですね。帰国されてからは？

帰国後は、日本でも引き続き、中国のアートやカルチャーを追い続け、2010年からは、フェスティバル／トーキョー*に所属し、毎年、中国の作品を東京の劇場に招聘する活動もしていました。その後、2015年から約1年間、ニューヨークでも生活しました。そこには、芸術やカルチャーを日常的に楽しむ姿があって、新たな刺激を受ける日々でした。ここでもニューヨークで活躍する中国のアーティストやクリエイターをコラムで紹介するなどの活動をしていました。

—では最後に、現在の状況と今後の夢について聞かせてください。

大学時代から一貫して追い続けているのは「中国」と「カルチャー」この二つだということに改めて気づきました。フリーランスとして好きなことを仕事にするというのは、一見すると「楽」なようにも思えますが、ただ「好き」なだけでなく「オタク」になる必要があります。「オタク＝プロ」です。また、組織に所属していないので、自分で仕事を取りに行かなければなりません。そのためは、常にその分野の情報を追い続け、自分なりに解釈して研究して発信しなければ誰からも気づいてもらえないし、仕事をもらえません。今は様々なSNSで発信することができます。もし、好きなことがあって、それを仕事にしたいければ「私は〇〇が好き」と頻繁にその分野の情報を発信して手を上げていく必要があります。また、人と違うことも強調しなければならぬ。私の場合は、中国の新しいカルチャーが生まれる瞬間を見続けてきた、そして、その現場に行って関係者に話を聞き続けてきたというのが強みだと思っています。その結果、「中国の若者、カルチャーに関する本を出しませんか」と声をかけていただき、2019年12月、初めての単著『中国新世代 チャイナ・ニュージェネレーション』(スモール出版)を出版しました。

新しいカルチャーは、若い人が中心になって生み出しています。これまでもそうでしたが、今後も中国の若い人との付き合いを続け、「オタク」であり続けたいと思っています。そして、より多くの日本人に「今の中国」「中国のカルチャー」を伝えていけたらと思っています。

—貴重なお話をありがとうございました。

聞き手 高橋京子 (1989卒)

*フェスティバル／トーキョー

2009年より豊島区の会場を中心に開催される日本最大級の国際舞台芸術フェスティバル。国内外の最先端の舞台芸術の招聘公演やクリエーションを行うほか、シンポジウムや教育プログラムなども実施される。

Kyoritsu
Spirit!

連載 私の学生時代 — 文芸学部で学んだ日々⑱ —

今回は第16期生の水野悦子さんに書いていただきました。

飛騨の高山から共立に入ったのは姉も共立(家政科)だったからです。鳩山薫学長の訓辞の後にはオリエンテーションの日々でした。シラバスに則って単位を組む作業に戸惑い、大学生になったことを実感しました。

第二外国語の仏語は、英語脳が一切捨てられなくて全くなじめず奈落の底でした。グラマーとリーダーに分かれていて、島田紅良、手塚伸一両先生につきました。

島田先生は梅原龍三郎画伯の令嬢で、命名は斎藤茂吉とのことでした。父上とパリに住み、メゾソプラノの発音の美しさで動詞の活用を唱えられるのですが、不規則動詞ともなると私はお手上げでした。当時皇太子妃の美智子様にご伝授されて

いたことや堪能なラテン語のこともあとから朱牟田房子先生から伺いました。髪はアップにされ、いつも和服姿でした。

手塚伸一先生は手塚富雄先生のご子息です。手塚富雄先生にも「ドイツ文学概論」を習いました。物腰の優しさが共通です。富雄先生の授業のとき、どこからか都市ガスの臭いが漂ってきて(階下は給湯器のある警備員室で)学生がざわめくと、先生は脱兎のごとく窓際に飛んで行かれてハハハと息をされました。大先生でも命が惜しいのかとお労しく思ったものです。

美術史の谷信一先生も印象的です。谷先生はご進講されたそうですが、白楽天のようなご風貌で、びっ

くりしたのはその上品なお口元から「お礼で皇居から頂いた物は、虎屋のお饅頭二つだけでした」と学生の笑いを誘ったことです。

英文学の吉田正俊先生も忘れられません。天国でまたお会いして文学・美術などのお話をお聴きしたいと思います。読む度に傾倒する文英堂出版の『都市と芸術家たち』は私の宝物です。お姿から筆跡に至るまで耽美そのものでした。一度私たちは千疋屋でジュースをご馳走になりましたが、先生は一口飲まれて「千疋屋も贖物かー。」もう一度あの頃に戻りたい!私は妙なことしか覚えていないようです。

水野悦子 (1972 卒)

広場

令和二年

自力で夏を生きのびてください

身の見えない妖怪変化タチウチできない

アツサより凄いやつは

目に見えない妖怪変化タチウチできない

脳天に一撃くらい ヒイヒイ

アツサは大江山の鬼よりスゴイ!

家の外に出たトタン

桃太郎の曾・曾・曾ばあちゃんです

ヒイヒイヒイ孫を見習って

皆をいたぶるコロナ

日ごとのさばるアツサ

悪玉退治に出かけたもの

秋元藍

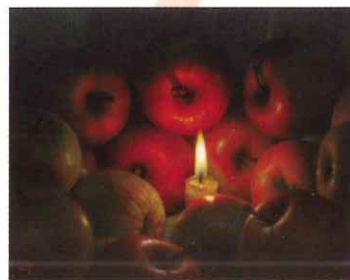


◇昨年夏、OGネットワークでコロナ禍の過ごし方についてのアンケートを取った際、秋元藍さん(1958卒)から、絵手紙をいただきました。転載いたします。

◇伊藤和子さん(1977卒)は昨年11月、「幻想絵画5人展」(銀座・三越)に出品されました。



「イギリスの朝」



「イブたち一月のない夜のー」

掲示板

INFORMATION

2021年度の活動について

新型コロナウイルス感染がいつ収まるのか、誰にも分からない状況です。2021年度の総会および文芸サロン講座開催等につきましては、残念ながら具体的な予定をたてることが出来ません。何か決まりましたらすぐに皆様にお知らせいたします。



編集後記

EDITOR'S NOTE

*1年ぶりに「通信」をお届けすることができました。*コロナ禍がすでに私たちの「日常」になり、以前から支援が必要な立場にある人々がさらに打撃を受けるといった事態になっています。亡くなられた方々の毎日の報道にも胸が痛みます。*人と人とが直接会って集う普通の日常がいかにありがたいかをコロナ禍で気づかされました。せめて人と人とを繋ぐ「通信」をお読みいただければ幸いです。皆様お元気で過ごしてください。(K)